

I 生徒の振り返りからの分析**1 生徒アンケートの項目別・学年別達成率（「できた」の割合）**

各評価項目の「できた」と回答した割合をパーセンテージで算出しました。

評価項目	全体平均	1年生	2年生	3年生
① 地震発生時の対処理解	99%	98%	100%	100%
② 校内「おはしも」遵守	88%	82%	93%	90%
③ 校外の迅速な集合	97%	96%	98%	97%
④ 先生の誘導への服従	100%	100%	100%	100%
⑤ 真剣な態度（帰宅まで）	94%	92%	96%	95%

【数値から見える分析】

- ・ 「おはしも」の課題：全項目の中で「校内での『おはしも』遵守」が最も低く（全体88%）、特に1年生（82%）に課題が見られます。
- ・ 誘導への信頼：「先生の誘導に従う」は全学年で100%であり、指示系統は完全に確立されています。
- ・ 3年生の意識：3年生は、数値上は高い（90%以上）ものの、自由記述では「周りの声が気になった」という指摘が多く、数値に表れにくい「質の向上」を求めている傾向があります。

2 成果と課題（数値的根拠）**【成果】**

- ・ 対処方法の理解（99%）：ほぼ全員が「地震時にどう動くか」を理解しており、事前の指導が行き届いています。
- ・ 2年生の安定感：全項目で93%以上をマークしており、中堅学年として最も模範的な動きができていました。

【課題】

- ・ 校内での私語：1年生の約5人に1人（18%）が「おはしも」をできなかったと回答しています。これは中学校での訓練への慣れや、移動中の緊張感の維持に課題があることを示しています。
- ・ 態度の継続性：「真剣な態度」は全体で94%ですが、移動完了後に気が緩む傾向が一部で見られます。

3 今後の目標

- ・ 「おはしも」達成率 95%以上（全学年）
特に1年生の改善に重点を置き、校舎内での「無言」を徹底させる。
- ・ 「私語」に関する自己評価の厳格化
自由記述で「少し喋ってしまった」と書いている生徒が「できた」にチェックを入れているケースが見受けられます。訓練の基準を一段高め、「完璧に無言だったか」を問い直します。
- ・ 避難完了タイムの短縮
集合（97%）はできていますが、さらに意識を高めることで、現在の避難タイムをさらに10%短縮することを目指します。

Ⅱ 教師の振り返りからの分析

1 教師アンケートの項目別達成状況

5段階評価（5：非常にできた ～ 1：全くできなかった）の平均値と達成率です。

評価項目	平均点 / 5.0	肯定回答率（4以上）
① 生徒への事前指導	4.7	100%
② 自身の避難・誘導行動	4.5	91%
③ 生徒の安全確認・点呼	4.9	100%
④ 職員間の連携・報告	4.2	83%
⑤ 訓練計画の妥当性	4.0	78%

2 成果と課題

【成果】

- 点呼・安全確認の迅速化（平均 4.9）

全クラスにおいて、避難開始から人員掌握・本部報告までが極めてスムーズに行われました。報告システムの簡素化が機能しています。

- 事前指導の徹底（肯定率 100%）

各担任による事前指導が徹底されており、生徒がパニックにならずに初動（机の下に入る等）を行えた要因となっています。

【課題】

- 教職員間の情報共有のタイムラグ（平均 4.2）

「本部へ報告が集中した際の待機時間」や「特別教室にいた生徒の把握状況」について、一部で連携に課題が残りました。

- 訓練の形骸化への懸念（平均 4.0）

「毎回同じルート、同じ時間設定のため、緊張感が薄れている」という意見が複数の教員から出されました。

- 不測の事態への対応力

「もし階段が使えなかったら」「負傷者が出た想定だったら」といった、応用的なシナリオ設定の不足が指摘されています。

3 教師側の分析から導き出す「今後の改善案」

生徒の反省結果（私語の多さなど）と照らし合わせ、以下の3点を今後の目標とします。

① シナリオの一部「非公開化」

- 次回は「避難経路の封鎖」や「清掃時間中の発災」など、生徒と教員の双方がその場で判断を迫られるような抜き打ち要素を導入し、判断力を養う。

② 無線・伝達手段の再整備

- 本部と各学年主任、特別教室担当者との間の連絡体制を見直し、混雑を回避する報告フローを構築する。

③ 「戻り」の指導の強化

- 生徒の反省で多かった「帰りの私語」を抑制するため、避難訓練の終了宣言を「教室に戻り、担任が事後指導を終えるまで」とする意識付けを徹底する。

※今回のデータの集計・分析には Gemini を活用しています。